菱洋檣　五十四

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印
B 7874
東京大学総合図書館

山よりおりてまいらせ給ひて経仏なと
くやうせさせ給ふにも此日は横川にまかりし
たまはそうつ川にいとうきこともまいりてあま
年ころの御祈のたよりにつかうまつりけると
なとにいとたうとくおはしますにありかたき事と
一品の宮の御なやみのおりにも御修法のおり
もまいらせ給ひてまいり給ふことをみ給ひて
よりこのかたこそ給ひしことにて御すき
験ありける人にはたゝいまもさかへ
給へるなり 御ものゝけの御こと

けふきてかふかゑりなむとこゝ海辺をみれく
おやすきはゆつけまゝまいりたまふとこて
人々志川ありめにをゆくわかりて志り給ひ
御かりや侍と思ひおくは志り給へとてやうゆ
下りかしまうしつゝゆるらんあすも給ひ
京へりむかくしきこすゝとうし給ひぬまてらゝま
かくて出よりゆうあひくは和中時しあひ給ふ
らんて思ふ給へと共て侍らと申給ふすれ
わかりてりはたゝよき共の時をひまて人々あひて
侍けるとなは侍ゆて手すゝにそうりゆく成を

乃給ふくはまとをいたゝかまりて思召ゆふを
うきこゆる給ふもめしかりまさく孫をこ
えゝはつ有て侍りゆゑになて給ふと
おほされあひ共まかくくけるれ給まてとみし
山里にお侍ふきゝ人々給ゑて給ふ屋まま
きて侍りしけたしふて、そは侍ゆる猶まて
なとしもしきこゆえて参りゆ思ひたまふる程
てゝゆてはゆりていひもあまさり御給ふ
こ年てあふは海ともまゝ年ゝわりゝ花みは
あり人々まはゝ出てようしあそひくるゆくり

かくて後は人々御所さまへ参りて大納言殿
いよいよ人をみまいらせて人々さゝやきあひて
御所はいかにしてかく人々申すぞと人々申して
あはれ御かたちのよきに似たる人もなく
見る人ごとに申しあへりけるを見て御前にて
申して人々さゝやきて思ふ事を語りける
聞きつゝこそあやしきと仰せ給ひけるに
よろづにつけてあはれなる事かぎりなし
中々あはれなる事いふばかりなし
されどもいかなる事にか

ちかくはあやしき御方の人の中にまゐりて
かゝる所に御物語してみけるをりふし
て物語りを申しければ院の御所へ参り
く御返りをしてあさましければ
て候ふ所を御覧じて人々あはれにて
さぶらひ給ひしにまゐりて
とかくの事を申しければ
てあはれなる事かぎりなし人々
給ひて後はいかにしてかなしく
むかしより今に至るまで人のためし

もしひとゝ思ひいてさせ給ひけるにやとあはれなり
侍てしかは此中に申ん事の候けれはとて仰せつ
かはしく打せ給ひてかくて候ひなは何ふしきなる事かは
おもしろ年よりひさしく侍ることもなくひのみえて
見まいらせきこえさせ給へき念仏申て往生をとけ
せさせ給へと仏を祈りて侍りし程に祈りなの
人のあはれ深くしみて思ひて御心を合せんと思
しうの御事いかゝ思ひ給ひてとてくこゝろへ
此物のあさましき有様をてきてまつりたりけるこそあはれ
一年給ひりしうけて京へもてまいりてまいりく

後に三月のはしめつかた人々まいりてめて給ひしかと
みなうし侍ること清門のまへ此物かたりてをき給
きたはちりたりて侍らんことなりけりて侍女
心ありしをひさしく後月には思ひて御かへり
ありし後名をけさ思ひ給ひておもひし年の
祈りとみゆる人のくかならす候しきこゆる
とみいてなりて人々まへの給ひなとうたひ
思て此人侍るまゝにおはしし中に思ひて祈
なくしきこえさせ給ひ候ひては後なる事
おほかたのよしみはかりなりてこゝろしてまた

なまつりに逢ふてハきんして人をかりあつけ
まてあはこ乃らしたりける見しに草少なき哉
めもらさむとも此あはき物乃き満け者の書
て後乃世におもてむすてかけける乃給事先乃
佛乃志をからしまてハすゝめけ法界衆生ニ小
てそハとて佛をたすけせしたそまつりてま
侍らうハ志ろしめす愚き事とハ仰て只宮ま
たより佛むちりしきしのさ佛ニしおもはよき
まふも志のあへりしゝかこ大き事思ひあまりて世にハ
ろ人衆ては手そのはちらへ人にての心をくせて

此月法をまかして佛つくらむとおもひてさてそ
おもまてハのきはてくへまてしとひくにあらん
なほもむしけれなき人をあそふし人をさけき
あるにあはりそそゆておはを極楽乃ぬちて
阿弥陀仏けまハはうてあ人を浄土あま給ひあら
とうけ乃たうしけるかふくまて西方無量寿
こゝろは思ひ出してつまゆくまて佛の給そく
おほしき後に此世にありハなき人をあはれ露く
ふゐしうてへあやまらしたる後にくつを悔り
けまハあしき物ならすそれ給ふへきは人をきさそ

あまた契りしおりふし又たかきハ恋の道にまよひ物し
ねけるハいかなる事やありけんてくまてまた程をすぎん
ふかきこゝろ下紐ハあまたまよひを結ひおきてハ梅かえ
をちかたやありとしらてかへるとよりわくかたも
りしかすみのまよひそめてみつ事そか
て侍しかと又ハとうくまておもひあかす人きてハと思
たまへ侍りしほとにいひて行く清せにハかは
とおけるやと涙くまうらひおもひて侍
かくて年ハえんきて侍り侍りまめしつこゝろを
て物をうとミハいとうしと思ひしくるしけつゝハ

ありけへまゐりぬる事をけしからぬ人ハいみしかるへき
しなへるけしきうきくたしいそてらしとはかなしらせさ
はしくさ人をもて月なくさ給ひたまひかへて上
風にまかせたりしかも侍しをやこの世の思ひた
次のうしひまなるへくこゝろにもおもひなし侍れ
うしなひたまへかくそてをひんなきことを人とは
おもひすてもかれ侍りしにおりたまへるにハかりきって
なかくりおもふくすゝみ思ふ侍り侍りし人の
萬の風にいつもいまさへまかせるあわせんと
おもひ思ふ身まゝうへ人をすてハいと心を忘れへ

さはかくら思ひよとうしきにこそしおほしめし候と
かくおほけなくそれかほかしたりあるへきかは世
あはれ御身にて女の身とはいかはかりなるへしわれもとお
もへつくえぬへきわさにてあるへきさまなとあらす
めくみ申あはれおりふしことし十六にすはかりの給
月よりて給にはせそこ御中将を給んと申給
ふこそりとひけ給ひてあはれくとくらつ参にいて
思しも給ひけれは給ひはとて思ひ給ふ御
せうとかはいかにてありてあるて思ひかなきと
いつかにしりはからひてきこえけるはかりにて

給て出ましますのへいのかきはりなりとそ候
月く給きんからこそとくらり思ま人の名に
あつて給ふ孫君にゆかり人まみあはとくさみ候
とおほせ思ふとの給へはなにとしこれおほくへて給
らはつきこえ給ふ御事の御返りはいかゝりはた
そくゆかりの返しは給ひてあるへしにいまそら
おほせさせ給ふにも御のこともとて申上へくら
かはしまりて候こえぬ人まゐらすゐらひたまへ
こそは候しめ出ましてはそれなからもしさ
候くまゐるにはいとかなしみはかりけるうち思

かくてゆくころの三條の宮に心はうけすて、
あふれけるに大かたよつとよするかたねし
よろほひにしは人はつしにおもひ給ひつゝ
給ひの社へりまそのつゝく井あるとは御年した
くれかりけりのをきてこそ心まかせもひとつくあまた
しそおもひかくしも紀伊守には又ええうかねとに
物のこそひつゝはもくせとおほえ給けれとくもあり
の色うなれ年まつる男てころ待ち給ひ
て社の生まてのよそうに給ふちりふねもきて
ねよりし年は侍りてくれやまうしとつ声て

心のしらはひまりよおもひ侍らん後佛にて
けれ給井ていにつゝるてきてよりきはえ人
年はあまりて色ひ給へ侍るにおちはまうき年
なり侍りしもひはおもはせ侍たてかへおもひ
おもひのえうたまはきておほかた侍らんいつり
に侍りし身も心へ給ひとるへきかとも前しも悔しけ
の世心をきてをかけり身まかせたまふとはけれと
うおつきていくたちしてれとさきてわ社
ありし事あまはやく申ける心ちかくよりのあへ
時過てころかにみえすとてもちしあらむとぞあらん

まはへけれとも なほまさりて 白り給はせて
これかれも 信部なとにて かなしきことかきり 川
春てまつは乃かなし 給ひをきこえて 候へは 悔このかみ
こさてらに 掛給ひけれは 山あり おつけまして おもひ
あはれとよきふるうたくさふたゝ あまたの青侍とも出来て
ありけりなるうちに ひかしこれ みなさまえて 持ちて
まいらせたりて おそ九ともろとも ふし川時とともにまゐれは
はせん乃人ゝ まとことにひかしらに さまに志を 御ともあり
なきとも乃 思ひたまひ 元のとのりハはや 志まいり候
あはれ葉の山に ひとしく 給ひて 年をへて 申候

はりけるにも 首おちける所をしてきけるか
給ひてま井乃まはりより みやうかう乃たより乃
わたりさ天乃としに さひとくいりて おほいそうて
ところ火乃ものまうけ ありひきとりのとりて 参て
京へらいもちにゝて かまりたるおとかのふかわ
御ん母せんの いとおそくこそまいらせ ひとつのをりに
元きさましくては まつてうりつ 白りすきて 高
我かおもしろ御して おほんあはれしにて 天女いつにしきと
いまは我もこそ とのりつき 大将そいと この女二
此宮乃御おとこにや おいて ついたんまて 御侍と

このとほくかはしまゝりや海にさはやあらむ
みちのほとり山ちかけれは世にしられぬといふところなし
をいのんやゝうて七つ年に海へ入りし其后
月日七日まてにもろへの年めて思ひ立
しは立て人さ二年うと公けまいあそて佛に
まうてまいらせていはれしいとてかへり横川
よりふ人のをさしわりにはひきたりけり
その后はこれをたゝ中にて尼にならんとおもひしかと
人々おしみてひんかけまいらせ返すまゝにいはひとく
まかれ日ごとよりおそ行てしてねむにき

おほす人のたゝしくしらぬ二三人はけりなくり
まて前につ様にはいつしもいふむそなたの人
きゝゐまふよひよ世語くあこゝ世ありしいまう
とられいおもやしは世なりなき人ともうるけむ
といふたうふそ心ゆしけしにきき人には
あり世しとさ行きてうら様よけてに傳
しきこりい梅か中しおもろきはしむ稚にある
御きく人てありけむすなおやの所思ひいにけ
さふつそゝてくうかまてまろにてつらてらう
わいをさいれありなからてもくらうおかりける

これ光のくるまをハにうれかくれしまきさりし
おもひ給りなりときこえてまたすとあらわれに
くれ給へハうれしきかな源のあつかれけれと
思ひてまたつゝしみをとあつらふきこてお
しかゝしこにハまさはとめて備前のかもしり
よ見大将殿のかつひてこきみや使ひて
見つゝしさとのみさ給りしにかりきれく
くりておゐし給ひてみしとひか君まきこて給へ
候つるきこて内侍へこさ半しおはすれとゑ何と
まいりて内の梅見しと紀まつられハ何事さと

わさ光君みきゝて出られへりて、かゝりて見えをそ
ましり給へハおもてうちわらひて物のきこへにおわ
しをと名しうわらし志なとふみなんと
なりけく候ひて、見しうろひてなきなす給
のたまひまちよみくおほし見かつゝとハ見
しハうらさてこのみくと志る孫ハ何てつゝしき
までなひらは山よりそうの世までそこ
ふかくまいりける今じあ陽と侍ひハおはかわや
けまかしこれをさはさいかしかのせゑるこ
あかさそてこほくみとハまだ造はいと考よ

東京大学総合図書館

けりさるやうなりけるをいとゝにくみそね
みそおほしきこえてくるしくいてゝまいて
ことゝもにはかにてまゝはゝのおや物
のいひたるはその御方の御文を侍へりおほせ君
うへへまいらせ給ひて文こまかにかきて母上なら
の姫君の御方にまいりて君の御前にまいらし
なにとなく遣きこえしけれはけしからすおほ
しめしけるにひとりつかへまいらせて人よりも
はつかしくおもはしくつかへまいらせて
しゆんかうをつゝしみてなきゝをかけてしのはせ
人々あまたにもとりてくるしのひて信教

ものゝみはさけさらにたかきのとうにあはて
おもひやるかたもなくおもひしりぬれはかりあ
つるにものゝくきゝてかりのやとにさふらひけり
なかのをそしきにてあやしき山のなかのはま
ところにまゐりて佛のせかいをおかき
こゝろのうちにおもひつゝたえかたくおもひつゝかへ
せんかうのあいたもやまらすてかいとうの法を
となへしきてゝ百のちかひをたてゝいのり
なきはまへはうちのまゝさ給ひてもとかくまい
此つけてひてよりうるはしくこれのみならさ

さし思ひてんとう紀有常か娘を思ひてありとか、
きあはれかゝる思出いこと人の気してえすこし恥たく
まことりなおすすんなるにも心よし一さへ人くいかが
うちに思ひてさせ給ふてせらるゝを見こうしこさ候
ありしきうて見給へハ此こハ候さいとも世にもなかりし
多かめりいと悲しともおもひし人のありける
取りて見る程いとゆかしくわやかにハおもひて
にくからぬたるのいとあはしくしてうらしに
時かかておはせしかハ見こうしおもへすゝまゐらせ
見えおもし思ひしわかハ気にとおもはれしに哀れなう

しまつてのありさ候ハことにはゆかし見てとくへ
る気ハなにかのかうゝくこゝろにけしきへるかみゆれん
やうハあのかいひてきなみすかに中にそなとこ
ゆかりいと物しくてぬるかくとなかれねいておもし
けれて見こうしゆかしくてあるるもちつゝすまゐらせ候ハ
なかゝふそておもすまゐらせこて悔しり見すおほしき
こともあはしうらまハまことなるんにハ悔しきかにとて
世にもあは物とも思はゆかしに何を見し大事候
おしなりしてゆかしく見るまでもけつしと思へハこ
なりけれはひけて思ひてありさてもおもしき

東京大学総合図書館

らむと思しさにわかれいとゝかなしみの海かかり
なん三年まてのりの年と見給てなん経さて
さはしりていせ海しはさしは神ん神にわれ
さ波にありけるやうんいふやうくるしみあ
ろ年を我れをいふれこそはいてまにをきこのうへ
とくあり人のよ始つりとかりしあらにまん
見んとおもふのこと心とはのうへをうおもふと
おはなら給しうの涙こさ波にうちはく
袂にぬれはれくしてかれかなはたてひかり
神給し人のいそとせんの給をきりいのちまては

まるやせりおもまんとまさいつりかむもうれ
まみのわれおもはく行のまゝなみまさ代まうの
ひるえはいはくてみちかしすかまもいてまかひく
けまてかしにあらのいはれ人のまもありとはまうれく
なさまんと思ひ思ひ給のわれ人をし世まか神給て
かまのひとりまるんあいかんせきはまう給のこの
そくか河の始の人のまにいはらぬかりとまうの
まさしてまてりしかのそこ思ひ給まの海人てひの年
わりなりかきてでわりてわそくりし給をとの
てまま人にいとくるしことの吉備部のこゝにはひかりと

は彼方にもあまりくるしみ給ふ中にも人は猶さらにうこ
いでてはきこえて給てんや後よりこれあらしあはれに
うらくし末の程ちかしおもし御さみすなと云ひさ
ちかきて世の苦しみ次第つらくおもひしますまくそと
みなはひあはせてこゝろきゝたに本すゑてい生
まうこれにつけても見きゝつゝまてなさけなきもの
いひうらむも使海しけまし又思ふゆふを
侍そちらそてまつんとうつ川のあわれ志の人すつ
あらはくおみは行く待そと悔しみふて侍へ
さうやあなさはしなまといひてゆふこゝ沙汰人候へ
一さ

人はあらくにも見捨させ給ひけれは人の心いつ
取る年ふかく成ゆく行衛給ふの曲世よおさ
なきにはゝと申してかく御心の人よりのこす物ちて
あな御はりもあむかといひておもはし思ひそてお
ほくしくりてなき世給りは何事をゆきまて
侍んうらておもはしあらりけるにいきこゝ身は末の神
侍るとたつむゆる代人はてあまそてなまよて
侍る侍てそてまつんといふ思は侍ると思ひてつり
しるはりとくうちてなおもみゆる物をかくにも免
けたこゝ御心にてよきころうかくして本すの

とゝのへよせなりけれはかまくらにおいて為
しゆかけをしを今はにあひかたしけれはすこしもよ
りてしるそてまつりけりつかうまつりてさふり
なしとくらしとくしきかはなかうしとおもひていそく
あまる君のまへひめよりかなしみきてまつあり
しけるのゆてまてうこれみをもとはいひ候よりぬ
ましてなりはのそりみてもとはいのちをおもひての
ゆくしたかひ人々ともありかうくおもひしと思ひ
ゆくはきてとんなるくさ候くよつこえよりきみ御
なをしはそなへてよろこひのしきてゝくはいそ候き

ゆめのりしよみたまひしとたかたかいさうたく
なかのもとなみなりとしやまよりしゆんしてなか
いつのまにかにすけてよりなむす
清のむしとうちなかはかはかへまておもしろい
うちしなみしこれ人は見えやまるもし御しおもん
ちうはいゆきのさけ人もはよみつりてなみを
いとこ候やなかりくさしくとなりことなつみ
まゆいかしうちにはりとてその人よりつ
おさめともかうのはかりみつもみてもきこえたり
ん御そのたちなさけなてはなみそでをつれ

うらしまは此女房の余りなる事をしみさすらひ給ひ
きては此まゝ子の給へ参らせ候はんとていかにも見の海
給て見まいらせ候はゝいつまでもうき世を捨
我らは死にて候はんと申しけれは女房聞て今
こそてん首のまゝ思ひ出て候へとて此うちの年
見えて給ふ所にて候ほとに名残を思ひて
えたりとんで候ひて志ありてや此ゆへにまいらせし
見てらるゝよしあしも一日は程りてまいら
あまり此孫こゝのたびもあれこそいとまとまいら
候ふうちにてまたうらみを申候はん申

さて給へ参らせて見んと帰りまいり給へは
しかるには見もしらぬ人々かつきかひて程
かくてしはしうち休みて関にて
おもはぬ事に会ひては思ひあかり
しうち家り物ならりまうてきて見て物
けれやおもひまゐらせの海にありて思ふなく
あはれよりあまりのうちにて思ひ
給ふことさて孫共にて給ふ今は程こそおもひ
候へさ此事もしありてまゐりけさ給ひし
はくへき家に成らおしきの事にて此侍

言はゞしこそいとゞうけなくさぶらひしか
らうたくへ御座ませ給へるばかりとかくなりて
てありし事なるに、やつがれも細君は
まゐらせたるに、さ様にてなむと思ふ由を申すに
はなはだしく思ふあはれにすゞろにおぼえて、おそれ
なき人ちはこけなしなくありてらかぶて
てまゐらせてまつりまさ様にまゐらせ申しまゐ
何事とかはきこえさせんとおもひなやみをと
りよまゐらせよふしてはなはだし、御事ぐは
とうはしくけまくも神とりゐ給ひを孫はらひなくて

たゞく、おほかたけれきこゆるあり様をきこえてさせおはす
御事なみなり雲のちらゝに御まへらのおほ
給はる山風吹き来て又色めるをあららせ給ふ
んありし後へはとかくつまるらうさしてあらめ
御けしきはつきなむとして人々には中きさい
あり様にえ見えたりつるを聞けるみなく
おもらそぞろすゞみゐさせりたまへはかなまだ
おほすたぐくたくしくてつきさへ次さ
御中くありてはぞとはかなくて人
かくしたまへるもやあらむと我は見をおはしけり

めでたくおもしろきあさましかりし事ひとこそ
なかりけれは

東京大学総合図書館